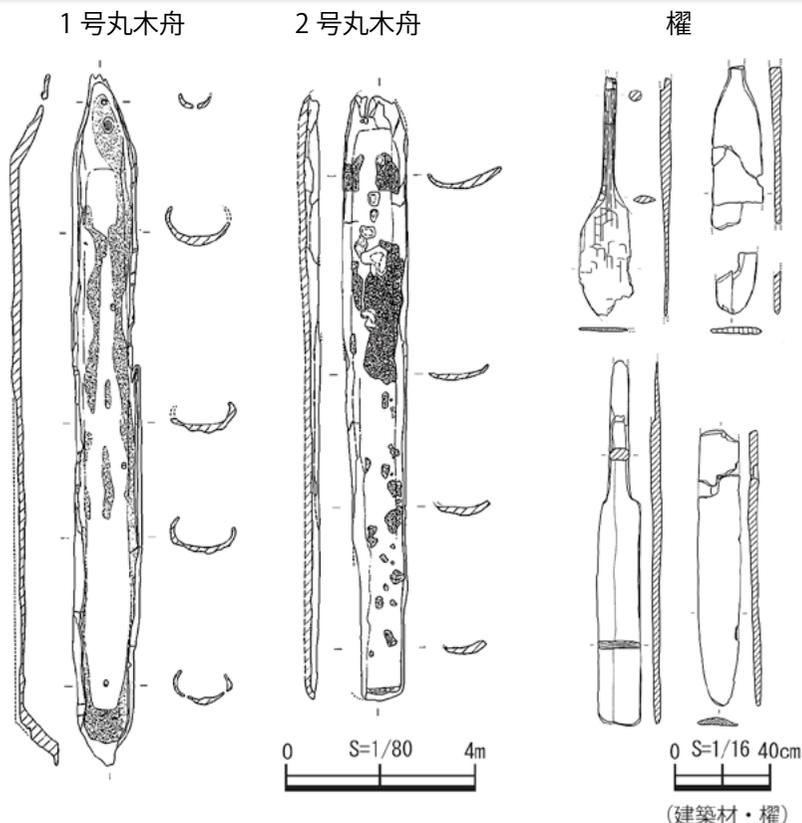


原始

第1章 日本文化のあけぼの 1.文化の始まり (2) 縄文文化

縄文時代の丸木舟

—桂見遺跡出土の1・2号丸木舟—



桂見遺跡出土の丸木舟と櫂(鳥取県史 資料編 考古1 p.177・178) ★

蛍光X線分析

X線を試料に照射して発生する2次X線(蛍光X線)のエネルギーや強度から、試料の成分元素やその構成比を分析。考古学では、黒曜石やサヌカイトなどの石器の産地同定に応用される。

★の写真及び図は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。

解説

■縄文時代の丸木舟

日本列島は海に囲まれており、多くの小さな島も所在している。縄文時代になると、気候が温暖になり海面が上昇し、漁労活動や黒曜石といった石器の原産地に行くためには舟が必要であった。縄文時代の舟は、丸太を半分に裁断し中をくり抜いた丸木舟が活用された。舟には帆などは取り付けられておらず、推進方法は櫂だけであったと考えられる。全国での縄文時代の丸木舟の出土事例は120艘を超えている。サイズはおよそ4～6mであり、幅50～60cm、深さ30～40cmである。石器の産地同定には蛍光X線分析が使われる。

■鳥取県内の丸木舟

鳥取県内での丸木舟の出土例は、6例程度知られている。その中でもほぼ完全な形の丸木舟が2艘、その他にも櫂が、鳥取市の桂見遺跡から発見された。遺跡は湖山池の南東に位置する低湿地遺跡で、丸木舟は縄文時代後期中葉の層から出土している。1号丸木舟と考えられるものは、長さが724cm、両舷が内側に湾曲するほど深みのあるものであり、深さは35cm程ある。2号丸木舟は、長さが641cm、深みのない浅い板状を呈するもので深さは10cm程度である。両者を比べたとき、形態が全く異なっていることから、1号丸木舟は「外洋性の漁労」や「黒曜石の運搬」など外洋航海用に、2号丸木舟は波静かな潟湖*等の内水域の「内湾性の漁労」や「集落間の物資の運搬」等に使い分けられていたのではないかと考えられている(久保2011)。縄文時代前期以降の石器素材として、隠岐産の黒曜石が山陰地方に運び込まれていることから、隠岐島に行くために丸木舟で海を渡っていたと考えられる。

*潟湖…砂丘・砂州などのため、外海と分離してできた湖。

(担当：吉田 学)

参考資料

- ・久保穰二郎「縄文時代の丸木舟」(『鳥取県の考古学 第1巻 旧石器・縄文時代』(2011年))
- ・水ノ江和同『縄文人は海を越えたか?』(朝日新聞出版 2022年)
- ・鳥取県『新鳥取県史資料編 考古1 旧石器・縄文・弥生時代』(2017年)